

第3学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 奈良市立都跡小学校

教諭 三木 恵介

1. 単元名

つかう責任 のこす責任～わたしたちのくらしと奈良筆から～

2. 単元の指導目標

- ・奈良筆についての製作過程や生産者の思い・工夫、また作られたものがどのようにして使われているのかを調べたりまとめたりすることを通して、地域で作られた文化的な価値をもったものを使用していくことが持続可能な社会に繋がっていくこと理解することができる。 (知識・技能)
- ・奈良筆を扱う薬師寺と自分たちのくらしについて調べたことを比較・関連付けて考えることを通して、地域で生産されたものと自分たちのくらしとの関わり方について多角的に考え、適切に表現することができる。 (思考力・判断力・表現力)
- ・奈良筆についての製作過程や生産者の思い・工夫、また作られたものがどのようにして使われているのかに関心をもち、意欲的に学習に取り組み、持続可能な社会づくりに主体的に関わろうとすることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

奈良の筆作りはおよそ1200年前までさかのぼり、現在まで続く奈良筆にその特徴が遺されている。奈良筆は「練り混ぜ法」と呼ばれる複数の動物の毛を混ぜ合わせる技法により、非常に繊細な穂の動きを実現している。奈良筆の穂の製作は、基本的に全行程を職人による手作業で行われている。

現在、児童が書写などで使う筆は、100円均一や中国製などの安い値段で手に入れることが可能である。しかし、安価な値段で購入できる背景には、大量生産・大量消費という側面があり、そこには販売者側の利益と使用者側の消費という経済的な側面での持続性しか存在しない。その持続性の裏には、環境の非持続性だけでなく、奈良筆などの繊細な穂先の実現という文化の持続性を満たすことができていない。一方で、職人が奈良という地元で奈良筆を作り、それを地元の寺社が使い続けるということは、環境・経済・文化の全側面の持続性を満たしている。職人の手によって文化の持続性が保たれ、地元の者が使い続けることによって経済の持続性も保たれ、さらには良いものを長く使い続けることは環境の持続性にも繋がるのである。

本実践で重点的に扱いたいSDGsの視点として⑫「つくる責任 つかう責任」を挙げたい。生産者の製作過程における工夫や文化継承への思いに気付かせ「つくる側」の視点を養うとともに、薬師寺で筆が使われていることに迫ることで「つかう側」の視点にも気付かせたい。さらに単元のまとめでは、地域の地場産業の製品を扱うことが環境・経済・文化の全側面の持続性に繋がっているということに児童自身が気付くことによって、自分たちには「のこす責任」があるという態度を培わせたい。

(2) 児童観

児童はこれまでの奈良市の様子の学習から、奈良市ではお茶やいちご作りが盛んなことを知っている。しかし、奈良市で昔から筆づくりが盛んであることを知っている児童は全くいない様子であった。また 3 年生になって始まった書写の授業で使用する筆の中にも、奈良市で作られたものがあることに気づいている児童はいなかった。児童にとって筆は単なる道具であり、自分たちのくらしと結びつきのある存在にはなっていなかった。

(3) 指導観

指導の際には、まず奈良筆の特徴や職人の想いに触れることで「作り手の想い」に気付かせたい。そうすることで児童は、地域で作られた奈良筆というものに愛着や誇りをもつことができる。次に奈良筆が地域にある薬師寺に奉納され、使用されていることに目を向けさせ、薬師寺を訪問する。そこで児童は「使い手の想い」に触れることとなる。作り手が良い筆を作り続けることが、使い手が思いを込めた字や作品を遺していけることに繋がっていることを、一連の学習から児童に気付かせていきたい。

そして単元の最後には、安価な大量生産された筆か奈良筆のどちらを今後使っていきたいかという問いを児童に投げかける。その時、児童が「奈良筆を使いたい。」と答えられるよう、それまでの学習で「作り手」と「使い手」の想いにしっかりと迫らせていきたい。さらに本單元では、「使いたい」という考えにとどまらず、奈良筆を使い続けることが社会の持続性にも繋がっていることにまで目を向けさせていきたい。それが本実践の目標である。

(4) ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【相互性】：奈良筆の学習を通して、作る側（文化の持続）・売る側（経済の持続）・使う側（環境の持続）は、相互の関わり合っていることに気付くことができる。

【責任性】：作り手の思いと使い手の思いに触れることで、持続可能な社会の視点を養い、モノを長く使い続けることの大切さに気付くことができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

①クリティカルシンキング：価格の違う筆を比べことで、奈良筆を使い続ける必要性を批判的に捉え、クリティカルシンキングの素地を養う。

②システムズシンキング：「作り手」「売り手」「使い手」のつながりから、文化・経済・環境の持続性が相互に関連し合っていることに気付く力を養う。

4. 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫などを調べた	①奈良筆を扱う薬師寺と自分たちのくらしについて調べたことを比較・関連付けて考える。	①奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫に関心を持ち意欲的に考えようとしている

<p>りまとめたりしている。</p> <p>②地域で作られた文化的な価値をもったものを使用していくことが持続可能な社会に繋がっていくこと理解している。</p>	<p>②地域で生産されたものと自分たちのくらしとの関わり方について多角的に考え、適切に表現している。</p>	<p>る。</p> <p>②持続可能な社会づくりに主体的に関わろうとしている。</p>
---	--	---

5. 単元展開概要

全16.時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
<p>1. 夏の思い出を俳句にして、筆で表そう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「奈良筆」についての学習への意識を高めておく。 	<p>①奈良筆についての製作過程や生産者の思い・工夫に関心をもち意欲的に考えようとしている。</p>
<p>2. 奈良筆って、どんな筆？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あかしやの筆のパンフレットを見ながら、筆の違いについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットを提示し、具体的な違いについて友達同士話し合いながら気付かせる。 	
<p>3. あかしやに行ってみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統工芸士の松谷さんから奈良筆についての特徴や制作過程について話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良筆の値段を決めているのは、職人さんがどれだけ手間暇をかけたかによって変わることを理解する。 	<p>①奈良筆についての製作過程や生産者の思い・工夫などを調べたりまとめたりしている。(知・技)</p>
<p>4. 奈良筆についてまとめよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「つくる側」の努力が、「つかう側」の思いと繋がっていることを意識させる。 	<p>①奈良筆を扱う薬師寺と自分たちのくらしについて調べたことを比較・関連付けて考える。(思・判・表)</p>
<p>5. 筆の良さって何だろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆の字・パソコンの字・自分たちが筆で書いた字・書家の字などを見比べてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あかしやに展示されていた薬師寺で使用された奈良筆を想起させる。 ・筆と墨で書かれたものは、何百年と遺るといふこと、先人たちの思いが伝わってくるということに気付かせる。 	
<p>6. 薬師寺を訪問して筆を使う人の思いにふれよう</p>		<p>②地域で作られた文化的な価値をもったものを使用していくことが持続可能な社会に繋がっていくこと理解して</p>
<p>7. 奈良筆を使うことはやっぱり大切？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良筆を使うと社会に何が 	<ul style="list-style-type: none"> ・良いものを適正な価格で購入することが文化・環境・経済の持続性を保つことに気付かせる。 	

<p>起こるか考えてみよう。</p> <p>8. 奈良筆と同じように、自分たちの暮らしの中の「大切に遺して使っていきたいもの」をさがそう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大量生産・大量消費は、経済的な持続性は保たれても、文化・環境の持続性はたもたれないことに気付かせる。 ・奈良筆を使っていくことが、どうして大切なのかを考えながら、自分たちの暮らしと結び付けていく。 	<p>いる。(知・技)</p>
		<p>②地域で生産されたものと自分たちの暮らしとの関わり方について多角的に考え、適切に表現している。</p> <p>(思・判・表)</p>

6. 考察と課題

(1) 児童の変容

本実践をおこなうまで、奈良筆の存在すら知らなかった児童は、学習を進める中で確実に奈良筆への愛着を深めていった。しかし、作り手側の視点のみの学びでは、その愛着は「奈良で作られた筆だから」

や「職人さんが一生懸命作っているから」といった感情的な愛着に留まっていた。

しかし、筆についての学習や薬師寺訪問の学習を通して児童は、筆本来が持つ価値に気付き、使う側の立場として筆への愛着を深めることができた。

そして、学習の最後には「作り手」「売り手」「使い手」のつながりを考えることで文化・経済・環境の持続性について考えを深めることができた。この学びによって児童は、愛着という主観的なものの見方から、社会のために奈良筆を遺していかなければならないのだという、客観的なものの見方にまで考えを深めることができ、育てたいESDの資質・能力を養うことができたと考える。

(2) 社会科学習とESD・SDGsとの学びの関連について

学習指導要領3年生社会科の目標には、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。」とある。しかし、実際の教科書の取り扱い、生産と販売の学習に留まり、消費者としての行動すなわち使う側の視点は、授業者に委ねられている。

本実践は、社会科で①作り手(生産)、②売り手(販売)を、総合的な学習の時間で③使い手(消費)を横断的に扱うことで、この3者の相互性を明確に可視化することができた。ESD・SDGsの視点から新学習指導要領に基づく社会科学習の展開を再構築できたことが本実践の大きな成果である。

(3) 課題として

課題としては、小学3年生という段階で文化・経済・環境の持続性について理解を深めていくのはやはり難解であったことを挙げる。社会の持続性を考えていくには、社会的事象に対する理解と得た知識を構造化していくだけの技能や思考力が必要だが、その段階まで至ることのできる児童はごくわずかであった。輸出入や食糧生産などの学習を経た小学5年生の段階であれば、消費後の廃棄の問題などについてまで考えを深めることができると予想され、一層深化した学習を展開できたように思う。発達段階に見合ったESDの学習展開を模索していきたい。